

第 4 回
市民まちづくり活動促進テーブル計画部会

会 議 録

平成 2 0 年 1 0 月 2 0 日 (月)
札幌市役所 5 階 南西会議室

1. 開 会

○河野部会長 おはようございます。

きょうは、岩尾委員はご欠席ということですが、時間ですので、始めさせていただきたいと思います。

本当にあつという間に日にちが過ぎまして、もう第4回のまとめの段階に入ってきておりますが、最後まで形になるように実績のあるものにしていきたいと考えておりますので、きょうもご協力をよろしくお願ひしたいと思います。

それでは、きょうも議題に沿って進めさせていただきます。

2. 報 告

○河野部会長 最初に、事務局から報告をお願いしたいと思います。

○事務局（秋川課長） 市民活動促進担当の秋川です。おはようございます。

それでは、ここ1カ月間の報告をさせていただきますと思います。

まちづくりワークショップということで、9月27日に、14名の市民に集まっていたきまして、市民活動についていろいろご議論をいただきました。その内容については、既に資料をお配りしていますけれども、まちづくりワークショップの概要ということで、2枚のペーパーにまとめております。加納課長がファシリテーターを行いまして、話し合っていた内容は、参加する市民に向けた施策、活動する団体に向けた施策、団体間の連携促進に向けた施策という三つの論点から活発なご議論をいただいたところでございます。

それから、まちづくりフェスタについては、10月5日にサッポロファクトリーで行いました。メインのイベントとしましては、市長と、森崎さんというタレントの方の対談ということで、ふだん市民活動に興味のない方も森崎さんのファンということで大勢集まっていたきまして。そういう意味では、今までにない階層の方たちに市民まちづくり活動について聞いていただく機会ができたのではないかと考えております。

ファクトリーでは、活動の発表をする団体が3団体ございましたし、ブースを設けて7団体の方が自分たちの活動のPRを行っていただきました。

それから、お手元にカレンダーをお配りしておりますけれども、そのカレンダーもさぼ一とほっと基金のPR資料ということで、来場された市民にお配りしたものでございます。まだ多少の余部がありますので、これも活用しながら、さぼ一とほっと基金のPR活動をますますやっていきたいと考えております。

それから、助成事業の応募状況ですけれども、さぼ一とほっと基金は、今、180万円の原資をもとにしまして、福祉、安全・安心、きずなという三つの分野で事業の募集を行ったところ、34団体の応募がございました。そこで、先日、審査部会で1次審査を行いまして、18団体にまで絞り込んだところでございます。

最終審査ということで、10月25日に北3条の日生ビルで公開プレゼンテーションを

行います。これは、1団体5分くらいの発表時間を予定しているのですけれども、それでも10時から4時くらいまでかけて行う予定でございます。

この団体について、実際に助成を行えるのは11月くらいだと思いますけれども、この基金の助成をもとにして、さらにまちづくり活動を活発にやってもらえればと考えているところでございます。

以上で、ここ1カ月間の報告にかえさせていただきます。

○河野部会長 ありがとうございます。

この間、本当にたくさんの方が催されたようです。私も、まちづくりワークショップには参加したのですが、まちづくりフェスタは、ほかのものとぶつかっていて、行ったら終わっていました。しかし、ブースの方はやっていたことを後から聞いて、ちょっとのぞけばよかったなと思いました。もし参加された方のご感想などがありましたら、後でお話しいただければと思います。

何か質問はございませんか。

もう一つ、このシートについても報告いただけますか。

○事務局（大瀬係長） それでは、私の方から、傍聴人の意見に関してご説明申し上げます。

前回の計画部会の際に傍聴人から意見シートが提出されまして、既に皆様にお届けしております。意見の趣旨としましては、従前、私ども事務局の方で、参加する市民の側からというくくりと、活動する団体等の側からというふうに二つに分けた上で基本計画のベースとなる内容を整理してきたところでございます。それに関しまして、個人、団体というくくりで整理してはどうかというご意見でございました。個人を大切に札幌のまちづくりに参加していくことが求められているということで、個人と団体というふうにくくってはどうかというご意見でございました。

これに関しまして、私ども事務局の方で検討したのですが、もともと現状と課題ということでまとめた内容につきましては、参加する市民の側と活動する団体等の側ということで、この団体等の「等」の中には個人も含まれております。今回、答申骨子案ということで皆様にお配りしているホチキスどめの資料の1ページ目の真ん中の米印で書いているところですが、参加する側と団体とを便宜的に分けた方が課題の整理としてはわかりやすくなるだろうということで、便宜的に区分させていただいたところでございます。現状と課題について区分した上で、実際の施策のあり方とか、施策を進める上での目標、それから施策につきましては、二つのくくり縛られることなく、実態に即しながらまとめていきたいと考えております。

一応、現状と課題につきましては、もともとベースとなっているアンケート調査自体が一般市民向けのアンケート調査と団体向けのアンケート調査と二つに分けてやっていたこともございますので、そのようにくくらせていただいた上で、実際の基本計画の答申あるいは基本計画の案自体をまとめる際には、その二つにとられることなく書き進めていけ

ればと考えております。

以上が事務局としての考え方でございますけれども、ご意見をいただいた上で、それによろしければ進めさせていただきたいと思っております。

○河野部会長 委員の皆さん、このことについてはどうでしょうか。

今のご説明で、個人について新しい骨子案には入っていないのですけれども、調査プロセスもあるようなので、それを加味しながらこの文言でいきたいということですが、よろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部会長 それでは、傍聴人の意見については、そのような形でこれから進めていきたいと思っております。

3. 協 議

○河野部会長 それでは、きょうの協議に入りたいと思っております。

市民まちづくり活動促進基本計画のあり方についての答申骨子案という形で出されておりますので、このことについて、まずご説明をいただいて、その上で皆さん方の議論に入っていきたいと思っております。

説明をお願いします。

○事務局（大瀬係長） 私の方から、答申骨子案についてご説明したいと思います。

あわせて、A3判の一覧表もございますけれども、これと対応させてごらんいただければと思います。

説明がちょっと前後しますけれども、A3判の一覧表は、前回提出させていただきました一覧表に追加ということで、赤文字で追加している部分がございます。これは、前回ご意見をいただいた部分を赤文字で追加しておりますので、全体としての体系は変わっておりませんが、中身をちょっとつけ加えさせていただいたところでございます。

例えば、高度なキャリアとか高度な知識を生かせるまちづくり人材の育成とか、企業活動の中で無理なく取り組める社会貢献活動の提案とか、連携のためのコーディネーターの創出というご意見がありましたので、そういった部分をこの中につけ加えさせていただいているところでございます。

答申骨子案をごらんいただきたいと思います。

今までご意見いただいた部分を答申骨子案という形でまとめさせていただきました。

できるだけ、皆様からいただいたご意見、ご発言の趣旨を損なうことなく、そのままに近い形で記述させていただいております。実際の答申案をまとめる段階では、もうちょっと書き言葉に修正させていただきたいと思っておりますけれども、現段階では生の言葉に近い形で整理させていただいております。

まず、答申骨子案の「はじめに」でございます。

この部分は、促進テーブル委員の連名で、1ページをそのまま使って記述したいと思っ

ております。基本計画のもとになった条例の制定に関することや、まちづくり活動を取り巻く背景、今回の諮問内容、検討プロセス、今回の答申のポイント、今後の計画づくりへの期待ということで、「はじめに」の部分を記述できればと考えております。

今回いただく答申につきましては、基本計画のあり方ということでございますので、そのためにも、1番目でございます現状と課題をしっかりと踏まえながら施策のあり方についてご提言いただいたところでございます。

この現状と課題は、各種アンケート調査の結果をもとに、まとめいったところでございまして、先ほど申し上げましたけれども、参加する側から見た現状と課題、活動する団体等から見た現状と課題というふうに便宜的に整理しております。

詳しい中身は、もう既に説明したとおりでございますが、1ページ目には、参加する市民は非常に参加経験が少ないということで、過半数が参加経験はないという結果があらわれております。市民の孤立化が進んでいて地域の中に不安感が漂っている。あるいは、最近非常に注目されておりますが、シニア世代のまちづくりに関しましても、参加意欲は高いけれども、なかなか参加が進んでいないということがあります。あるいは、コミュニティー活動において、まちセンの役割に非常に高い期待が寄せられるということを書いてございます。

次に、2ページをめくっていただきたいと思っております。

活動団体側から見た現状と課題ということで、町内会は従前からいろいろな活動を行っております。ただし、比較的新しい活動であるテーマ型のNPOとかボランティア団体につきましては、活動年数も10年未満であったり、小規模団体が多いという現状が浮き彫りにされております。また、助成金に関する情報のニーズが高かったり、人材育成の面では広報に関する講座の設置を望むとか、レベルアップして事業企画の力をつけられるような支援が求められているということがわかると思っております。

人材につきましても、継続的に活動を担う会員、あるいは、参加してくれるボランティアが求められているという結果が出ているとか、活動の場では、身近な会議室とかスペースの設置、低廉な事務所スペースへのニーズが高いという結果が出ております。

また、前回も非常に議論になりましたけれども、団体間の連携につきましては非常にニーズが高いということです。既に団体間の連携を行っている団体も結構おりましたし、これから行いたい団体もあるということでございます。ただ、いずれにしても、団体間をつなぐコーディネート、あるいは、きっかけが求められるということがわかると思っております。

また、コミュニティー団体である町内会でございますけれども、担い手不足や役員の高齢化という問題が浮き彫りにされております。

また、企業のCSRにつきましては、札幌市内はなかなか進んでいないという実態が浮き彫りにされましたし、社会貢献活動そのものに対して企業の方では余り強く認識されていないということが明らかにされております。

こういった現状と課題を踏まえまして、課題解決に向けた基本施策についてというところ

ろでございます。

まず、市民への効果的な情報提供が必要だろうと。特に、これからまちづくりに参加したいと思っている方とか、まだ実際には参加していないけれども、多分、情報を効果的に提供すれば参加に結びつくような市民もいらっしゃいますので、そういう方たちに関心を持ってもらうような工夫が必要だというご意見がございました。

その情報の提供につきましても、まずは自分の身の回りへの関心から始まって、だんだんと深くまちづくりに関心を持っていくような情報発信の仕方が大事だというご意見がありました。

あるいは、3ページ目に行きますと、盛り込むべき事業項目が一番上にありますけれども、地域で行われる活動のほかにも、環境とか福祉というテーマ別の活動に関する情報提供が大事だというご意見がありました。あるいは、余り肩ひじ張らずに気軽にできるボランティア情報が提供されるといいというお話がありました。あるいは、活動段階に応じて、中には非常に専門的に活動したい方もいらっしゃるということで、そういうニーズに応じた、あるいは、その方のレベルに応じた活動の場の提供も必要だというご意見や、各種イベントでのまちづくり活動をPRするような取り組みが必要だというご意見がございました。

また、市民ニーズに合わせた多様な活動の場づくりということで、今言ったことと関連しますけれども、本当に活動をしたことない方に関しては、まずは興味を持てる活動の場を設定する必要があるとか、特に団塊の世代で非常に高度な知識やキャリアを持っている方に関しては、そういう能力を生かせるような場を提供する必要があるというご意見がございました。

また、3ページ目の下の方でございますけれども、非常に身近なことから高度なことまで段階的に関心を呼ぶような取り組みということでございます。

いきなりまちづくりに入っていくよりも、まずは自分の住んでいる身近な地域でどういふことがあるのかということから入っていく、あるいは、自分の趣味や関心のある事柄から入っていくような入り口があったり、そこからまちづくりに結びつくような取り組みが必要だというご意見がございました。

また、4ページ目でございますけれども、子どもの教育ということで、本当に小さいころから、教育の中から、あるいは学習の中で地域について学んで、自分のまちに誇りと自信を持っていけるような取り組みが非常に大事だというご意見もございました。

盛り込むべき事業項目の中には、体験型学習事業というご提言がございました。また、市民と市民、あるいは市民と団体が交流できるという取り組みが大事だというご意見がございました。特に、大きなイベントということで、そのイベントの中でいろいろな出会いがあったり、ただ、そのイベントが一過性で終わってしまうと、なかなか次に結びつかないので、そういうものを日常的に結びつけるような取り組みが行われる必要があるというご意見がございました。

それが、盛り込むべき事業項目ということで、4 ページの一番下にございますけれども、市民、個人を団体につなげるマッチングの仕組みというご提案をいただいております。

また、5 ページ目でございますけれども、これも前回いろいろご意見をちょうだいした地域の交流サロンの促進ということでございます。既にシニアとか子育てサロンはいろいろございますけれども、分野ごとではなくて、多様な世代が自由に集えるようなサロンが必要ではないかというご意見でございます。また、そういうサロンが単に交流するだけではなくて、今後のまちづくりを展望したり、そこからコミュニティビジネスというビジネス展開につながっていくようなダイナミックなサロンが、今後、必要ではないかということでございます。

この盛り込むべき事業項目の中では、地域の茶の間と呼んでおりますけれども、そういうものの設置を促進するような取り組みが必要だというご意見をいただいております。そこでは、まちセンの役割も考えていく必要があるのではないかというご意見もありました。

次に、6 ページ目でございます。

総合的な情報支援ということでございます。ここでは、一方的に行政の方から情報を提供するだけではなくて、お互いに双方向の情報発信といいますか、団体同士がいろいろやりとりするような場があってもいいのではないかということでございます。

そういうことも含めまして、盛り込むべき事業項目ということで、まちづくりの総合情報発信サイト、また、団体みずからが情報発信、情報交換していくことを支援していく必要があるというご提案がございました。

また、公共、民間施設の有効活用ということでいきますと、そういう施設の情報を一元的に提供していくような仕組みが非常に大事だということでございます。

さらには、身近な打ち合わせの場などの支援も必要だというご意見もございます。

それから、資金的な支援の部分では、特にさぼーとほっと基金に関してでございますけれども、基金メニューの多様化というご提案をいただいております。特に、新しいボランティアの育成とかまちセン活動をさらに活性化するような助成メニューというご提案をいただいております。

次の項目ですけれども、活動主体の種類、活動段階に応じた育成支援ということでございます。いわゆる人材育成の部分でございますが、前回は議論が集中しておりましたまちづくりコーディネーターの養成ということで、これも本格的なプログラムをつくっていく必要があるのではないかということで、これが札幌ならではの人材育成のプログラムに結びついていくのではないかというご提案がございました。

7 ページ目でございますけれども、そういうことも含めまして、盛り込むべき事業項目ということで、キャリア、高度な知識を生かせるまちづくりの人材育成プログラム、あるいは、札幌市の中で行われているいろいろな人材育成プログラムの体系化、相互の関連づけが必要ではないかというご意見です。あるいは、まちづくり講座の参加者を地域の活動につなぐという仕組みづくりです。学んだことを実際に生かせる仕組みづくりというご提

案をいただいております。また、先ほど申し上げましたコーディネーターの育成ということで、その育成に関して検討するプロジェクトの結成とか、分野横断的なコーディネーターの育成プログラムとか、育成されたコーディネーターを地域へ結びつけるような仕組みづくりというご提案をいただいております。

また、企業の社会貢献活動の促進施策ということでございますけれども、現状と課題でも企業のCSR自体がなかなか進んでいないという状況がございましたので、まず、そういった企業に対する意識啓発も当然必要だということです。また、地域の中で何が求められているのか、まず、足元である地域の中で貢献するように働きかけることが必要ではないかと。特に、大きな企業に関しましては、どうしても国際的な貢献という部分に目が向いてしまうので、足元を見てもらうような取り組み、働きかけが求められているということでございます。

また、企業が無理なく社会貢献に行くためには、ふだん行っている営業活動や企業活動の中で自然に社会貢献に結びつくような取り組みも含めてやっていただくような提言や提案が必要だというご意見もございました。

次に、8ページ目でございます。

ここは、団体同士の連携や交流という内容でございます。

まず、ご提案いただいた内容としては、いきなり協働ということではなくて、段階があるのではないかとということでございます。まずは交流、連携、協働というつながりの深まりを促進していくという視点が必要だというご意見もございました。

また、上から二つ目と三つ目の項目ですけれども、ITを活用した情報交流、また体験的に活動に触れられる機会の設定ということです。ここはまだご意見をちょうだいしていない部分でございますので、きょう、もしご意見がありましたら、この部分もちょうだいできればと思っております。

また、その下の協働関係の普及というところでございます。

よく問題になっているテーマとしましては、町内会とNPOの協働ということですが、根本的に活動エリアが違うということが指摘されております。また、もし町内会とNPOの連携を促進するとしても、まちづくりセンター単位、地域の単位でいろいろ課題が抱えられている、そういうものを解決する中でお互いの連携を図っていくといえますか、自然に行われていくのではないかとご意見もございました。

また、行政が主導的に行っている事業の中でも、NPOに権限移譲といえますか、予算も渡して、NPOに自発的にやっていただくような取り組みがあってもいいのではないかとご意見もございました。

盛り込むべき事業項目ということで、まず、団体間の連携とか、いろいろな協働の事例を普及したり、あるいは、NPOと行政の協働事業をやっていくというご意見もございました。

そういう中で、行く行くは市民が主体的に組織を独立させて運営していくような、そう

いうことを創出、促進していくような取り組みも必要だというご意見がございました。

いずれにしても、そういう連携のためにはコーディネーターが非常にかぎだということでございますので、連携のためのコーディネーターが非常に求められる。特に、地域の中ではまちづくりセンターに大きな役割が出てくるのではないかというご意見がございました。

さらには、9ページ目でございますけれども、コーディネーターの部分と、行政の窓口といいますか、協働の仕掛けをつくってくれる窓口のようなものも同時に求められてくるというご指摘がございました。

9ページ目の上から2番目の盛り込むべき事業項目ということで、地域における多様な団体のネットワークを進めていくような支援というご提案もございました。

また、こういったもろもろの活動の充実及び連携の促進ということに関しまして、下支えするといいますか、庁内の推進体制というところでございますけれども、まず、地域において横に広がっているまちづくり活動に対応して、市役所の方も横断的な推進体制が求められるということでございます。また、一人一人の職員の意識が非常に大事だということでございますので、まずは市民目線ということを職員が学ぶためにも、市民と職員と一緒に学び合う場も非常に有効だというご指摘がございました。さらに、地域に密着したまちづくりセンターの役割の充実というご提案もございました。まちづくりセンターの具体的な役割に関しましては、本日、ぜひご意見をちょうだいしたい部分でございます。

それから、計画の進行管理、検証ということでいきますと、この計画部会は来年度以降は事業検討部会に変更いたしますけれども、それ自体が進行管理、検証を行う場でございますし、市民参加のような形で一緒に意見を述べるような体制づくりも非常に大事だというご意見がございました。

最後に、この基本計画の計画書の作成に当たっては、実際に参加していない市民の意識を盛り込むことも大事だというご指摘がございました。

10ページ目でございます。

基本計画の中では、重点事業ということで、コーディネーターの養成を含めた人材育成の視点を重点化すべきだという意見がございました。

この基本計画そのものは、ある程度のボリュームがある計画書になると思いますけれども、わかりやすいダイジェスト版をつくって、市民向けにわかりやすい情報提供を行う必要があるというご意見がございました。

ということで、今までの計画部会の先生方からいただいたご意見に関しまして、このような形で答申骨子案をまとめさせていただきました。

本日、いろいろご意見をちょうだいする中で、こういう意見を追加してほしいということや、まだ出ていない項目、あるいは、コーディネーターとかまちセンの役割、札幌ならではの重点事業の部分に関しまして、こういうものを盛り込むべきではないかというご意見を本日ちょうだいできればと考えております。

私からの説明は以上でございます。

○河野部会長 ありがとうございます。

それでは、今のご報告に対して、基本的なところで何かご質問がありましたらお願いします。

赤い字でつけ加えていただいたところが、前回、私たちが出した意見ですが、ちょっとボリュームが出てきたなという感じがいたします。

もしなければ、また中身について一つずつやっていきたいと思いますが、よろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部会長 それでは、答申骨子案ですが、一つ目が市民まちづくり活動を取り巻く現状と課題です。現状と課題について、非常に丁寧にまとめていただきました。それでも、まだ足りないところや、こういうところはどうなのかというご質問やお考えなどがありましたら、出していただきと思います。

次第にあるように、事務局の方で協議のポイントを三つ上げていただきました。今のお話の中でも多く出てきましたけれども、まちづくりの人材育成です。コーディネーターという言葉であらわしていますけれども、人材育成に関してどのような内容を盛り込んでいくのか、あるいは、地域のサロンとかお茶の間の場所とかいろいろな言葉がありましたけれども、恐らく、中心的になると思いますが、今も稼働しておりますまちづくりセンターが今後どのように役割を持って活用されていくのかということで、少し具体的なところがあればお話しいただければと思います。また、重点的に行うべき事業について、さまざまなお考えがございましたら、新規事業に向けてたくさんのご意見を出していただければと思います。

そのようなことを絡めながら、一つ一つについて見ていきたいと思っております。

現状と課題のところではどうでしょうか。

今までも大分話されてきたところではあります。

参加経験がないが6割と多数であるところをどう分析するかというのがこの中では大きい内容だと思います。その分析の上に立って、それを解決していくという次の段階にステップアップしていくのだと思います。ここでは、さまざまな意見が出されてきているように思います。

○横江委員 大体出ていると思いますが、通常、日常生活をしていて、それほど必要性を感じていないのかもしれないですね。この中でも出ていますけれども、きっかけがないと、なかなかつながらないのかなという気がします。大体、課題が出されているので、その解決策に向けて何をやっていくかということがその後いろいろ出てきていますけれども、知るきっかけとか、自分の役割を果たせるものがほかにもあるという興味とか意欲づけというものが課題として見えてきているので、大体出ているのかなという気がします。

○岩見副部会長 確かにおっしゃったように、僕らがこういう活動をしていて感じるのは、

確かにきっかけは必要なのです。例えば、僕はシニア層ですけども、何かやりたいと思っている、こういうことをやりたいと思っている、しかし、どうもその一歩を踏み出せないのです。例えば、奥さんがしっかりしていれば、奥さんがご主人の背中をぽんとたたいて、「行ってらっしゃい」と言って送って、仕方がないからという形で一歩を踏み出すことがあります、そういう存在がないとなかなか行けないのです。ですから、背中を押してくれるような仕組みが何かないかなと思います。

これもコーディネーターになるのかもしれませんが、そういうものがあれば随分違ってくるのではないかと思います。みんな問題意識を持ち始めているのです。これは、男性のことですけどもね。

○菅原委員 男性は、何かをやらなければならないという意識を大抵は持っているので、今言われるように、ぽっとだれかが押してくれると、ぽっと行ける部分もあるのです。

それから、この中にもちょっと出ていますが、町内会活動の中で年齢が上がっているというのは、私は違うのではないかと思います。なぜかというと、若い人で町内会活動に結構入りたいという方々もかなりいるのです。ところが、がんじがらめで年配の人たちで押さえてしまうものだから、入りづらいのです。なぜ、そんなところに行って、お年寄りの仲間に入ってやらなければならないんだという意識もあるのです。ですから、交代の時期というか、そういうものが物すごく大切だと思うのです。入ってくるものを拒む町内会組織が実際にあるのです。ですから、そういうものを取り除いていかないと、背中を押してもらって入ったけれども、その中には到底溶け込めないという部分もあるのです。昔からの組織の中でがんじがらめにしているものから、そこを解決していかなければ、町内会組織の中ではなかなかうまくやれないと思います。

若い人たちも結構いるのです。ですから、今度はその組織ではない別のものをつくってやるということが結構あるのです。

○河野部会長 本当に背中を押してくれる仕組みというか、本当に若い人たちも入れるような働きかけを実感できるような、何か見えるようなものを求められていると思います。

○岩見副部会長 その機能ですね。例えば、市民側から言うと、まちづくりセンターはなぜあるのだろうということをわかっていないと思うのです。僕も、どういうときにまちづくりセンターに行ったらいいかというものが無いのです。あそこに行っている人は、町内会とか、民生委員とか、クラブなどの偉い人は行きますが、一般市民は行かないし、どういうときに行ったらいいかわからないのです。

○菅原委員 そういう仕組みになっていないからです。あそこは何かを発行してくれるところという意識しかないのです。住民票を発行してくれるとかね。だから、まちセンの活動のことについては、90%の人はわかっていないわけです。わかっているのはほんの一部の人です。わかっているけど、どういう活動をするのかという活動の内容は一切わからない人がほとんどです。私たちもちょっとわからない部分があります。何かを発行する場所だろうということしかわからないのです。もっともっと広げていかなければならないこと

はたしかですが、それは利用する側ももう少し勉強しなければならないだろうと思います。その発信するものも大切です。

○河野部会長 例えば、新しく入ってきた住民をどうやって結びつけていくかということは、今、地方に行くと、それがすごく大事ですね。新規に入ってきた人たちと地域の人たちがどうやって結びついていけるかということは、御飯を一緒に食べたり、いろいろなことをしながら新しい人と結びついていくということです。それは、地方の過疎という中では重要な課題なので、それに組み込まざるを得ないということもあるのですけれども、都市であっても孤立化していく人がすごく多いとしたら、新しく町内会などに入ってくる人たちと従来の人たちがどういう手の合わせ方をするかということは、片方で課題としてあるかもしれませんね。新しくどんどん入ってくるから、新住民だなどと思っていると、そこに断絶が生まれてくるということがあるのではないかと思います。それで、まちづくりを余りイメージできなくなってしまうということもあるのかなと思います。

○臼井委員 一般的には、市民が何かをしたいとか、何かをしなくてはと思っても、それが真っすぐまちづくりにはつながらないのではないのでしょうか。例えば、趣味だったり、旅行だったり、囲碁、将棋、盆栽とかいろいろあるのでしょうかけれども、僕たちは、いろいろな企業からいろいろなサービスや商品を届けられる、そのお客様になってしまっているから、ある面で何かをするとなったときに、まちづくりという概念は全然入らないのです。だから、何かをしよう、イコール——イコールでなくてもいいのですが、まちづくりをダイレクトに連想させるような情報というか、そこなのだろうと思うのです。まちセンがあることすら知らない人だって多いです。

○安田委員 何かをしたいということがすぐにまちづくりにつながらないということも一つですが、リタイアして時間の余裕ができたシニアの方たちは地域に目を向け始めているのです。今までは、住んでいたのだけれども、寝に帰っているだけで、子育ても妻に任せっ放しで、自分の住んでいる地区はどんなところなのかを知りたいという気持ちがあります。ですから、そういう講座には割と参加するのです。その中には、例えば地域の歴史とか自然環境のスポットを紹介するということが多いのですが、そういうものを支えている市民活動があるとか地域の活動があるということまで深く話をして情報提供すると、市民がそうやっているのだ、でき上がったものを私たちが享受しているのではなくて、支えている人たちがいるのだということに初めて気がつくのです。その次に、そういうものもまちづくりの一部なのだということをお話すと、やっとなんと入っていくのです。

今までのいろいろなまちづくり講座では、まちづくりとはというところから始まっていたのです。また、全く知らない人にとっては、例えば結婚とはと話してもわからないですね。それよりも、こういうものがあって、川の近くの公園がきれいになっていて、皆さんは、散歩をしていたり、写真を撮っていたり、犬の散歩をしたりして、実はこの公園の整備にかかわっている人たちが町内会と小学校とNPOだったりするのですという話をすると、とてもよくわかってもらえるのです。ですから、まちづくりの前に、まず地域を知る

という機会をたくさんつくっていくのがいいと思います。

それから、どうしてもシニアの人たちを少しでもということはあるのですが、そのテーマによっては、おじいちゃんと孫が参加できるとか、お父さんと子どもがそういう講座に行って体験できるとか、そういう機会があってもいいと思います。

行政の事業では、どうしても子ども向けとかシニア向けと縦になるのですけれども、地域にはいろいろな年代の人がいろいろな背景で暮らしていますから、各地区にそういう入り口があると、その中にはまちづくりセンターというものがかかわっているのです。まちづくりセンターの機能についても少し知ることができると思います。

○河野部会長 本当にそうだと思います。地域を知ることですね。この間、北海道の公民館の集まりの研究会があるのですが、その一番大きなテーマは地域を知ることです。職員はそのコーディネーターにならなければいけないのです。それも、今、歴史とかいろいろな話があったけれども、ワークショップ的に実際に地域を歩いて、自分たちでチェックしながらとかね。それから、異世代でつながるといことです。今、安田委員がおっしゃるとおりの活動が今は一番必要なのではないかと。少しでも顔が見える関係性を、横というよりも、異年齢で設けていくことで地域がすごく見えてくるし、そこから新しい活動が生まれてくるのではないかと、そんな発想が語られていたと思います。その視点は、今の時代にとってはすごく大事なのではないのでしょうか。

○岩見副部会長 例えば、札幌は移動人口が多いではないですか。移動していった場合、地域のことをよくわかりません。ですから、札幌で移動をして住民票を入れたら、区役所ではなくて、まちづくりセンターに行きましょうと。そこに行けば、地域のいろいろな情報を提供してもらえるし、地域とどうかかわったらいいかかわりますというような、そういう流れをつくっていく。

もう一つ、僕が思ったのは、前に在宅介護支援センターがありましたね。あれは、ちょうど連合町内会の数と同じくらいだったのです。本当は、あれをそれぞれのまちセンに、当時は連絡所だったと思いますが、委託された事業所でやるとか、市民と結びつくメイン事業をそこで行って、そこにいろいろな枝葉をくっつけて、地域の人がそこに来やすいような環境というか、場づくりをします。今のままだったら、いつまでたっても行かないです。もったいないです。あれは、僕は札幌のすごい財産だと思っているのです。各地区にああいうものがあるというのは、ほかの政令市でもないですね。

○安田委員 今の時代には、なおさら貴重な機能です。まちセンの連合町内会のエリアで行うイベントはセンターで把握されているのですね。

○菅原委員 ただ、人材育成にもかかわることですが、今、まちセンの所長がそれを全部関わるというのは酷だと思います。まちセンによっては、かなり仕事量が多いところがあるのです。ほとんどないところもあるのです。そのばらつきが物すごいのです。

○岩見副部会長 そうですね。所長さんの姿勢によって全然違います。

○安田委員 世帯数も関係しますね。

○菅原委員 私のところは3万何ぼで、その中の一つですからね。その中に三つの連町があります。そうすると、うちの所長に言うのは酷なのです。副がいれば、それに没頭することができるのです。また、従来の業務に没頭する人もできるのです。そうしないと、これもやりなさい、あれもやりなさいと所長に言うのは酷だと思っております。ですから、その場所によって、副も置いてやりたいという意識を持っています。そうすると、その人がこれにかかわることができるわけです。何もかもというのは酷ですから、専門家として、地区のコーディネーターとして配置してもらおうと、すごく助かると思います。

○安田委員 コーディネーターのことが何回か出ていますけれども、エルプラザの市民活動サポートセンターはどういう位置づけになるのか。今までの活動事業を見ていますと、活動団体に対してとか、団体を立ち上げた人にいろいろなアドバイスや情報提供をするのが一つの仕事という感じを受けるのですが、地域ごととなると、エルプラザでは手が回らないですね。ですから、まちセンでも地域のコーディネーター機能を持つ、それは所長が持つのではなくて、コーディネーターということです。また、市民活動センターでまちづくりの研修したときに、参加者から、元気なうちは車でエルプラザまで来られるけれども、だんだん年をとってきたら自分の近いところで今の仲間と一緒にやりたいと思っているという意見があったのです。確かにそうかなと思うのです。そういうところの受け皿が必要だと思えます。コーディネーターというのは、二段構えの考え方も必要かなと思います。

○河野部会長 実情に合わせた中で活躍できるようなシステムが必要でしょうね。まちに1人いればいいというだけのことでなくてですね。

○菅原委員 所長の任期が2年ですからね。こういうことをやってきた人が来るのならいいけれども、まず100%、ゼロの人が来るわけですから、それから始めなさいとなると、2年たった次部署へ行かなければならないのです。ですから、今後は別なコーディネーターとしてそこに配置するということが大切なのかなと思います。

○河野部会長 現状の課題から解決策まで話が行っているような感じですが、問題は、市民がまちづくりに入っていくところの入り口の問題だということですね。どういう形で入り口を用意されていくのかということころは大きな問題ではないかということです。背中を押してくれるとかいろいろあるのですけれども、その中で、まちづくりセンターの機能がもう少し市民の人たちに見えてくる、住民の人たちに見えてくる、そして職員も含めて充実していくと、もう一つ幅が広がっていくのかなと思います。

先ほどの報告の中に子どもたちの話も出てきていましたが、そこでも地域を知っていくような取り組みがなされていくのは、すごく大事なことなのでしょうね。

現状と課題というところは大分煮詰まってきたように思いますが、よろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○河野部会長 それでは、今の話にもありましたけれども、課題解決に向けた基本施策というところに入っていきたいと思います。

先ほど指摘されたのは、ITを活用したとか、具体的な案がまだ出ていないところもあるという報告もありましたので、ちょっと気にとめていただいて、ご意見などをいただければと思います。

ITを活用した情報交換や交流を図れる仕組みの構築、もう一つは、市民が団体の活動に体験的に触れられる機会の設定ですね。どのような中身で、どのように解決していくのかという具体的なところになると思います。

○岩見副部長 先週、私が地方に行ったときに、その地方で火事があったのですが、消防団員に携帯電話で通報が入るのですね。

○河野部長 駆り出されていくのですか。

○岩見副部長 そうです。状況によっては出動という形になるのです。

それを見てふと思ったのは、今、携帯電話はほとんどの人が持っていますね。例えば、あらかじめ登録していた人に対して、例えば、今週はこんなイベントがありますとか、こんなものがありますという形で携帯に情報を提供していく仕組みはつくれないのでしょうか。

○白井委員 今はメーリングリストというものがあります。

○岩見副部長 パソコンではやっていますね。

○白井委員 mixiに代表されるようなソーシャルネットワークサービスがあります。ああいうもので、自分たちの団体の中で、あるいは、その団体とその団体が結びついたら、そこで情報をやり合うことは可能なのですが、携帯でそれができればということでしょうね。

○河野部長 私は詳しくないのですが、今、携帯もメーリングリストのように使えるのですね。

岩見副部長も入っておられますか。医療、福祉のメーリングリストという物すごく膨大な、お医者さんがやっているシステムがあるのです。そこで流すのは情報だけなのです。そこに登録しておく、自分たちのいろいろな活動とか、参加していただきたいということが毎日のように二つ、三つ流れてきて、その情報に合わせながら自分たちが動いていく。自分たちで決めることなのですけれども、そういうものもよく使われています。

○安田委員 携帯でも、登録して、どこかのサーバー……。

○岩見副部長 例えば、市民活動促進担当課からメーリングリストで入ってきます。今までは、ああいうものが一方的に入ってきますが、余りよく見ないのです。ついつい、削除、削除となってしまうのです。例えば、きょうは暇なので、どこかでこんな講演をやっていないかと問い合わせたら、きょうはこういうところがありますという連絡がぽんと来るとかね。そういうものは難しいのでしょうか。

○安田委員 多分、基本的な仕組みは日雇い派遣と同じだと思うのです。それを管理して、例えば区ごとにするとか、そういう情報を発信するための情報を常にメンテナンスしていなければだめですね。受け手については、携帯を登録して、情報をもって、これは行き

たいと思ったら返信するという形なのでしょうけれども、大変なのは、地区の事業、イベントの情報をちゃんと集めて次々に一元化していくということですね。札幌市全体ではなくて、区とか地区となったら、どれだけコストをかけてだれがやるのかということになると思います。

○河野部会長 そういうものを管理するのが大変ですね。

○安田委員 中身的には日雇い派遣と同じでしょうね。

○菅原委員 そういう情報発信をするNPOがあってもいいと思うのです。そういうものを把握していただく組織が一つあってもいいと思います。そうすると、札幌市全体を網羅できて、そこに言えばすぐに情報が入るという活動をしてくれる部署をつくってもいいと思います。

○安田委員 地域で、携帯を使っていない人たちも対象にしたいとなると、今、いろいろなところで行われているまちづくり講座をもっと簡単にするといいと思うのです。事前学習をちょっとと体験1回くらいをセットにして、それを1年間に何回かいろいろなテーマで開くと。それは、スタンプをもらっていてもいいですが、中学生の職業体験のような形で、自分は何に関心があるのかよくわからないけれども、この地区でやられていることだったら近いから行ってみよう。きょうは環境、きょうは子どもの関係、きょうは歴史というふうにやってみて、これが向いているなと思ったら、もう一回、こういうものに参加するとか、体験をやっていた団体に申し込んで、今度は運営側の方でもう一回やらせてもらうということがあってもいいと思うのです。簡単なものですね。

○河野部会長 ごくごく身近なところですね。

○安田委員 そうです。夏休みだったら、親子で参加してもいいようにしておけば、あとは季節ごとに、今は冬のイベントがありますけれども、地域のこと何回か参加していると、顔見知りもできると思うのです。

○河野部会長 それは、③の市民が団体の活動にということで、団体でなくてもいいわけですがけれども……。

○安田委員 そうですね。体験に触れられる機会ですね。団体ばかりではなくて、今は実行委員会形式の事業が多いので、町内会とNPOと区と一緒にやっていますね。そのためには、体験先を探すのは結構大変なのです。それは、区なりでカレンダーのようなものをつくって、それを次々に足していくと。この時期で体験できるもの、また、その事業で体験を受けられるのは3人まで、5人までという情報があると、やりやすいと思います。

○河野部会長 私たちも、毎年、乳幼児を抱えたお母さんたちが発寒川で遊ぶ事業をしているのです。川遊びですけども、遊ぶだけではだめなので、川の役割というか、NPOの自然を守る会と三つか四つくらいが一緒になって、そういうものをやるわけです。そうすると、発寒川のことを非常にわかるというか、この川がどこから流れてきて、この川は私たちにとってどんな役割があるのかということを知らされたり、そこにすむ生き物とか小動物とか魚を一生懸命眺めたりするわけです。そういうことを地域の中でやると、非常

におもしろいでしょうね。そういうところに、乳幼児を抱えたお母さんたちも遊ばせながら参加するということがあります。そういうことは、地域を知っていく上でも大事なんでしょうね。

ここに書かれているさまざまな団体、機関と連携すると。

I Tをどう情報交換の場にするかというところから外れていきましたが、それもツールを持つという意味では非常に大事なことなのでしょうね。自分たちで使えるものを使っていくと。

○岩見副部長 今、団体ごとに出てくる情報が結構ありますね。ただ、我々から見れば、あしたの日曜日は特に予定がない、どこかに行きたいな、何をやっているのだろうという形で調べたときに、何もないのです。そういう情報が全くないのです。ですから、カレンダー風に、この日はここでこんなことをやっていますという一覧が出てくれば、非常に行きやすいのではないですか。そういう情報が欲しいですね。

○菅原委員 情報を発信してくれる場所が必要だと思います。

○河野部長 取りまとめをし、整理をして発信してくれるところですね。

恐らく、これから先は出てくるかもしれません。NPOの活動の役割として出てくるかもしれません。

○臼井委員 そうですね。映画館は毎日新聞に出るので、同じことですね。

○河野部長 あれは必ず見ますからね。何日までかとか、女性デーかとかね。

○臼井委員 言ってみれば、人々は生活のサイクルを考えるのがどんどん短くなっているのです。1カ月後にこうしようとは余り思わないで、あしたどうしよう、きょうどうしようですから、それに対応できるようなシステムでしょうね。

○河野部長 おもしろいことが見えてきたように思いますが、自分でも積極的に獲得できるようなシステムがあったらいいなということですね。

ほかにどうでしょうか。

コーディネーターの育成事業というのは、これから札幌発の発信型のプログラムをつかっていこうという話もこの間あったように思います。

先ほど、まちづくりセンターにも行っていただいと、資格と言うのは何ですが、コーディネーターということで、余り特別なものになると、市民や住民と乖離したり分離していくのはよくないのですけれども……。

○安田委員 基本的な知識は必要ですね。

○横江委員 情報の提供というのも、きょうの情報、あしたの情報、これから1カ月とか1年間というところまで広がってくると、自分の興味を持ったものですね。きょう、あしたはあいているから、すぐに自分に合った情報を得るといことと、今後、ことし1年間なりの活動をしていくときに興味のあるものですね。各団体が各団体ごとにいろいろなことをやっている、あるいは、各まちセンの所長さんの能力にもよりますが、いろいろ把握しているものを、きょうはこういう行事があります、今月はこういうものがあります、こ

としてはこういうものがありますというふうにやってくださっているところもあるのです。きょうの事業に参加したけれども、関連する行事として今年度はいついつに何がありますと。例えば、きょうの会議に参加してくれて、11月にはタウントークがあります、12月には防犯の講演会がありますということで、各部がいろいろ企画しているものを案内してくれる、あるいは、区民センターでコンサートがあります、映画の観賞会がありますというふうに、参加した市民に対して、何に興味があるかわからないのですけれども、そういうものを把握している範囲の中で提供してもらっているのです。

ただ、それはどうしても負担をかけてしまうので、それをお手伝いできる市民のスタッフが参加者の中からできてくればいいと思っているのです。そうすると、それをお手伝いしてくれる市民グループだったり、NPOだったりということで、まちセンと一緒にあってその地域を活性化していく町連の役員さんでもいいですし、個人の市民でもいいですし、そこで活動している市民グループとかNPOでもいいと。そういう緩やかなネットワークが各地区ごとにできてきて、各区でできてきて、例えば区で10カ所のまちセンがあれば、そのまちセン10カ所を連携できるような区の一つのネットワークができてくる。その10区をつなぐと、今度は札幌市と。札幌市は、市の本体の機能とエルプラザとかちえりあもありますので、そういうところとネットワークをつないでいくということです。

この間、エルプラザで会議があって問題になっていたのは、せっかくいい場所にいい機能を持ったものがあるのだから、エルプラザから87のまちセンにうまく情報とかネットできるような仕組みがだんだんできてくると、それが札幌市のちえりあとかエルプラザを核として各まちセンにつながる。そうすると、いろいろやっている企画の情報を得やすくなるし、市民が参加するきっかけも多くなってくると思っています。そして、活動に興味のある人たちの中から、これは今後の課題でもありますけれども、コーディネートできるような方たちが育ってくるといいなと思っています。

○河野部会長 市全体に流れていくような……。

○横江委員 そういうふうになると、素晴らしいですね。

○岩見副部会長 私のイメージは、コーディネーターという名称も一工夫する必要があると思いますけれども、今の時代の市民活動のリーダー、市民リーダーをどう養成するかということが根っこだと思うのです。ですから、要件的には、札幌という地域理解の問題とか、どんな資源があるとか、企画力はどうかとか、人間関係論とか幾つかの要素が出てきますね。そこら辺の要因を整理して、それをプログラムして養成の研修体験につなげていって、それにインターンシップのようなものを取り入れていって、ある程度、時間をかけて体験的に学べる仕組みでやって、それが終わったら、実際に地域でやるような場をきちんとつくっていくと。ですから、受け皿をあらかじめ整理しておいた方がいいのかなという気がします。そこら辺は、本格的に何かできないかなと思います。

○臼井委員 北海道の規模でいくと、例えば、各地に花とガーデニングのワラワーマイスターがいるのです。ワインで言えばソムリエですね。ホテルで言えばコンシェルジュです

ね。まちづくりコンシェルジュでしょうか。コーディネーターと言うと、ちょっとね。もっと身近に入り込んで、なおかつ、普通の方々が気軽に相談したいなというところがあるといいですね。

○岩見副部長 今、福祉系では、厚生労働省が地域福祉ソーシャルワーカーを全国で養成しようという動きがありますね。あれは、まさにそういうところにつながっているのです。以前、さわやか福祉財団でやったのはネットワークカーです。

○横江委員 どういった資格制度みたいな要件を持つ制度にしていくかというのは今後の課題ですけれども、とりあえず、そういった人材を育成していくということですね。文部科学省は、学校地域支援本部で、学校を中心として地域とのコーディネートができる人、退職校長やPTAの役員をと言うのですけれども、現状では退職校長が多いのかなという気がします。経済産業省で言っているキャリア教育のコーディネーターについても、特別な資格ではないのですが、地域と学校と企業を結ぶことができるコーディネーターをできる人ですね。これも、札幌市を活性化するために、そういうことができる人材ということで、やりたい方はだれでもやっていただいてよろしいのですが、少なくとも市の大事な企画には参加していただけたらとか、それが、年間、まちづくり局でやっている10月5日の企画とか、札幌市として大事な企画が年間12回ありますと。少なくとも何回かは出て研さんしていただきたいと。それが、強制のようになってしまうと嫌われてしまうので、市の企画に対して興味を持って参加できると。それを、今度は各区とか各まちセンの範囲の中での企画なり参画に結びつけていくということです。という、かなり多くの人材が、自分たちが参加していても意欲を持てますし、興味のあるものに積極的に参加いただくというふうにできたらいいなと思っています。

○岩見副部長 私が札幌に来ていろいろなOBの人たちと会ったときに、教員のOBが多かったのです。そこら辺はどこかでやっていかないと、うまく行かないと思います。

○安田委員 私もそう思います。それよりも、その地域が大好きというところから、そのかわり、養成プログラムを20時間きっちり受けて、それでもやる気があるかどうかということをしつかり確認してやってもらう。もし、得意のテーマがあるのだったら、一番、関心、興味があるテーマがあるのだったら、それも含めていただけたらとか、やはり地域とのコーディネーター、いろいろな団体のコーディネーターということで、コーディネーターは主役ではないのです。あくまでも裏方なのです。それを勘違いされやすいのです。それをわきまえて、活動したり、これからやってみたいなという市民を主役に持っていけるような資質を育てていかなければならないと思います。

○河野部長 ややもすると、立場とか役割ということで人材を充てていくというのは、もうそろそろ整理されていってもいいのではないかと私は思います。町内会も、それでだめになってしまったというのはよく聞く話です。本当にそこに住んで、その地域を愛せている人たちが主役になりながら、それを支えていける人たちがたくさん出てくるということにならないと、まちづくりはできないと思います。

○岩見副部長 一般的には、縦型で、肩書きのイメージでやってしまってしまうでしょう。元どころこの部長だから、この人はこうだとかね。でも、実際には商店街の経営者の方がよほどうまく地域を仕切るという例がいっぱいあるわけです。ですから、そこら辺のバランス感覚も見据えながらの養成ということですね。しかも、札幌の特徴的な、札幌まちづくり何とかとか、コンシェルジェとか、何かないのでしょうか。

○横江委員 今、生涯学習で道民カレッジの検定試験が26日にありますけれども、市民カレッジもあるでしょうから、そういうところでみずからが意欲を持って参加している方が一番大事な人材だと思います。そういう人たちが共通の認識で、共通の価値観で、市のまちづくりとか活性化と同じ方向を向いてやれる人たちがふえてくると、協力体制も生まれるのではないかと思います。

○河野部長 本当に期待されるコーディネートということですね。とりあえずは、コーディネートと言っておきますけれども、そういう人が地域の中で活躍できていく場がふえていくと、おのずと、まち全体も躍動してくると思います。

話があっちへ行ったりこっちへ行ったりして申しわけありませんが、課題解決に向けたというところでは、本当に細かくいろいろな提案が少しずつなされてきているように思います。

もう少し時間がありそうなので、別のところでも構いませんが、いかがでしょうか。

企業の社会貢献というところでは、この間もいろいろな話が出ましたけれども、どうでしょうか。

○岩見副部長 関係部局間の連携というのは、いろいろな地域の中で活動していると思うのは、行政の縦型はどこかで解決できる問題ではないのです。例えば、先ほど言った介護つき住宅の問題にしても、介護と住宅という二つの問題が出てくるわけです。ところが、それを包括しているところが札幌市にあるかといったら、何もないわけでしょう。住宅課と介護保険課と高齢福祉課との関係が出てくるわけです。これは市にお願いしたいことですが、そういうときにきちんとやってくれるような仕組みというのはお願いしたいですね。

○河野部長 先ほどの横江委員の意見も、それに近い整理のされ方をしなければ下の方まではいかないということになると思います。本当に重要なことですね。そこで、市民、住民が混乱するということはたくさんありますね。ちょっとアクセスしようかなと思ったときに、あっちこっちに振り回されるということは結構あるように思います。

臼井委員、何かございませんか。

○臼井委員 今、企業は、例えば熱帯雨林を保護していますということをやっているのですが、もう少し地に足をつけて、市民が活動していることに対してバックアップしたり、あるいは連携したりという視点が大事だと思うのです。企業は企業で、例えば開店するところに木を植えましたとか、自分たちの論理で勝手にしているというのは少し時代おくれになっていると思います。例えば、市民のまちづくりを手を携えて一緒にやるとか、地域の中で一緒に活動していけるような企業像が求められているのではないかと思います。

もう一つ、先ほど、この部会が始まる前に岩見副会長がおっしゃっていましたが、いわゆる悪質な業者ですね。それは、ITでも、まちづくりでも、どこかでうまく市民あるいは団体をインボルブして何かしようということは、これからいろいろな形で起こってくるので、そういう注意事項のようなものはどこかに必要なのかもしれないと思います。市民は、まちづくりのためということで善意でやっていることが、いつの間にか、悪あるいはグレーにつながっているということが起こりかねないと思うのです。今、悪質な方々の動きは巧妙化していますので、どんどんやりましょう、やりましょうもいいのだけれども、そういうときに、チェックリストなのか……。

○河野部会長 具体的に、どのようなことが考えられますか。

○臼井委員 例えば、まちづくりでこういうものをしましたと市民にメールが来ますね。実は、それが悪質な何かの扉になっている。また、非常に巧妙に金融機関のホームページを装っているということもあります。きっと、彼らはこういう活動の中にも目を向けてくるに違いないと予想すると、やりましょう、やりましょうもいいのだけれども、ひょっとしたら別の意味でのコーディネーターの目ききのようなものが結構必要になってくるのかもしれない。

○安田委員 私も、それはちょっと不安があります。ここで言わない方がいいのかなとも思っていたのですが、あくまでも善良な市民を前提に全部話が進んでいるのですけれども、札幌の場合は顔の見える地域社会ではないわけです。これだけ大都会で匿名性ですからね。まして、これから地域の茶の間ということで、どんな人でもふらっと行けますよと、そのふらっと行けるのはいいのですけれども、そこでいろいろな販売があったり、宗教の勧誘があったり、いろいろなことがあるということも考えに入れた仕組みを考える必要があると思います。先ほどの携帯もそうですけれども、そのデータを何かで流されるのかもしれない。今、防犯メールを警察とか小学校でやっていますけれども、確実に個人情報を守りながらやっているという時代ですが、名簿は必ず出てきます。体験に参加するといっても、だれが参加するのかということで名前を全部出しますけれども、それがどう流れるかわからないということがあります。その部分は、明文化するかどうかは別として、大事なところだと思っています。

○河野部会長 そこは、きちんと押さえておかなければいけないということですね。

○安田委員 それから、企業と市民活動の連携では、先ほどからシニア世代とか団塊世代というお話がありましたが、企業の方をお願いしたいのは、ぼんと退職するのではなくて、退職する1年くらい前に、市民活動に参加したらどうですかと。

○河野部会長 企業教育をしていただくということですね。それは、最近、よく言われてきていますね。

○安田委員 進んだところではもう始まっていますけれども、そういうことを会社の中で促していただけるといいかなという気がします。

○菅原委員 大手の企業ではやっているところがありますね。ただ、中小企業では、まだ

そこまでいかななくて、はい、さようならで終わってしまうところがすごく多いです。

○河野部会長 地域デビューの仕方みたいな。

○安田委員 そうですね。

もっと進んで、新入社員の研修の中に1項目入れてもらえるというふうになっていくといいなと思います。

○横江委員 今の意見は非常にいいですね。私も、ある企業に行ったときに、NPOの名刺を出したのですが、課長さんか部長さんにこれは何かと言われまして、知らないのかなと思ったのです。何をやっているのかと聞かれて、答えたのですがけれども、怪訝そうな顔をしていました。

ということで、企業のある部署の方とか理解のある方は知っていても、企業全体とか企業人としては、よほどのきっかけがない限り、市民活動とかNPOとかまちづくりという意識は持たないと思います。自分のまちに対しては、日常生活と寝に帰っているだけというくらいですから、それ以上の意識が芽生えないのかなという気がします。きっかけがあれば芽生えると思うので、企業さんでそういうものを意識していただいて、協力するのであれば、そういうことも、日常、投げかけてほしいなということがあります。

○河野部会長 おせっかいだと言われそうな気がします。そこまで言われたくないよと言われてしまいそうな気もします。でも、本当に必要だと思っていたり、何かしてみたいなと思っている人たちにとっては、とても大事なものになっていくと思います。

○臼井委員 最終的には社員の幸福のためですからね。

○岩見副部会長 今、僕は戸惑いがありまして、うちのNPOには企業からの出向が2人いるのです。1人は前からのつながりで問題ないのですが、最近、毎週月曜日に、社長からの命令ということで1人がうちに手伝いに来てくれるのです。まだ1カ月くらいです。しかも、孤立死に関心があると言っているのです。ところが、どういう目的なのか、何なのかということがよくわからなくて、逆に警戒しているのです。

○安田委員 セミナーに1回参加してくださいとか、本当の事務局にはちょっと……。

○臼井委員 あり得るかもしれませんね。これからのマーケットを考えていく上で、孤立死というのは、そこに何かのチャンスかあるかもしれません。

○岩見副部会長 こういうものは、市民活動促進担当課が企業とNPOを結ぶ窓口になってキャッチボールをやってもらえればありがたいのですけれどもね。

○河野部会長 それは、企業から直に来るわけですか。

○岩見副部会長 ホームページを見て、関心があったからという形ですね。

○河野部会長 きっと、いろいろなパターンがあると思いますけれども、そういう意味で、地域デビューを促していくということもとても大事ですね。

残り時間が少なくなってきましたが、人材育成の問題とか、重点事業もありましたね。新しい事業に向けてですね。

先ほど、まちづくりセンターに、今の所長さんには仕事の量があり過ぎるという意味で

は、まちづくりの専門を担当するような人がいるといいというのは、職員であるか、地域の人であるかということはいろいろあると思いますが、そういう人がいることによって、まちづくりが促進するという案も出されたように思います。

こういう事業をやったらいいのではないかというところがございましたら、ぜひ一つ、二つ出していただければと思います。

○岩見副部長 私がほかでやっていて、すごくおもしろいと思うのは、シニアによるクリエーター養成講座です。要は、市民活動のサービスをつくるということです。やはり、資源は足りないですね。行政でしたら、金銭面での支援をしますけれども、ある面では起業なのですけれども、起業までいくと大変だから、むしろサロンをつくりたいけれども、どうしたらいいかわからないとか、そういう講座を二、三十人規模で、2泊3日で、1カ月くらいあけて、もう一回、2泊3日でやっているのです。その間、実際に地域でやるわけです。それは、企画から実行までなのです。そこで採択されたら、年間30万円とか40万円を2年間とか3年間助成しますからやってくださいと。これも人材育成と絡んできますけれども、そういうことはおもしろいなと感じます。

○河野部長 ある意味でプログラマー的な役割を果たしていくということですか。

○岩見副部長 そういう講座は意外とないのです。

○河野部長 2泊3日というのは、その間、そこに詰めるということですか。

○岩見副部長 実際にやっているのは、真駒内の青少年会館に泊まり込みです。そうしたら、そこでコミュニケーションもとれますし、夜もみんな泊まり込みでということですか。最近泊まり込みの研修はなくなってしまったからね。でも、すごくおもしろいです。

○河野部長 それは、シニアという冠をつけてやっているのですね。

○岩見副部長 そうです。

○河野部長 私事になりますけれども、授業などで学生たちが何に喜ぶかという、私の事業は社会教育ですから、そういうプログラムをつくらせたり、計画づくりを実際にやらせたりするのですけれども、そういうときは全然寝ていないです。没頭して、自分の発想力をすごく楽しむのです。また、それは私たちの時代と違って、いろいろな情報を得ているということもあるので、力があるのです。非常におもしろいです。自分の発想力をそこに生かして、形になって、実際に行ってみるとなると、すごくおもしろいかもしれませんね。単に机上で聞くだけではなくて、実際にやってみるということですね。

○岩見副部長 最近、地域の福まちなどで出てきたのは、今までは福まちなら福まちの住民だけを対象とした研修でしたけれども、そこに介護保険事業所とかケアマネとか地域包括とか、地域のいろいろな資源が一緒になって、ワークショップ形式で、一つの課題に対して、一つの事例に対してやっていって、それをやりながらネットワークをつくっていくというものが出てきています。本当は、まちセンあたりが中心になって、地域の社会資源を集めて、いろいろな事例を検討するような場を持てば、もうちょっと地域のいろいろなものがつながってくるのかなという気がします。単なる一方的な講演ではなくてね。

○菅原委員 福まちはよくやっていますね。すばらしいことだと思います。ほかの地域のものも共有していこうということも入ってきています。やはり、まねるということも大切ですから、そういう交流がすごく盛んになってきたことは確かです。

○河野部会長 それでは、大体出たでしょうか。この基本施策の中に丸がふえていくことがすごく大事だと思っていたのですが、どうでしょうか。

○事務局（大瀬係長） きょういただいた意見をもとに、また事務局の方で整理させていただくことになると思います。

○河野部会長 事務局として、抜けているところとか、もっと議論してほしいというところはありますか。

○事務局（長谷部室長） 今まで私どもがイメージしている計画の体系図をごらんいただいたのですが、あくまでも、いただいた意見というのは、計画のあり方ということで、計画自体は行政が責任を持ってつくる役割がございますので、その役割分担を明確にしたいと思っています。ですから、例えば、私どもは答申書にないことを入れる可能性もあります。それは、ここで全部議論をしたわけではございませんし、庁内議論もしますので、実際の計画書自体にはここで議論されていないことを入れることもありますので、あくまでも最終的な責任は行政にあります。これは、議会の議論のときに、附属機関の意見は大事にしますが、最終的な責任は行政にあるということなので、それについては明確にした上で計画づくりを進めていきたいと思っています。

今回、いただいた意見の中で、発言の趣旨を話し言葉で出したのは、ニュアンスが伝わりやすいようにしたためです。ただ、文章化するときには書き言葉になるので、若干、変わるかもしれませんが、次回に文書の案を出しますので、それは皆さんにもんでいただきたいと思っています。あくまでも皆さんの意見でございますので、いかようにも直していただくことを前提につくります。きょう、いろいろなヒントをいただきまして、我々はあした新規事業の議論をさせていただく予定ですが、そのときの参考になるようなご意見もいただいておりますので、ぜひ皆さんの意見が生きるような計画にしていきたいと思っています。

私からは以上でございます。

○河野部会長 ありがとうございます。

それでは、委員の方からご意見があればお伺いしたいと思います。

○横江委員 補足的になると思いますけれども、各地域、各区でやっているいろいろな行事をつないでという話をしました。それは、札幌市の各部局でやっている行事も同じで、自分のところだけではなくて、横断的にいろいろなものを、これだと思うものを、人材育成に役立つようなものについて、積極的に参加された方たちに対して紹介していく、声をかけていくと。市民一人の立場としては、自分が提案したことや意見が、ある種、地域のために役立っていくのだという役割を感じてもらえたら、少しはやる気も出て、意欲づけになって、各地域につながっていくのではないかと思うのです。そんな中から、優秀な人

材が育ってきて、それぞれのまちセンの協力スタッフとか、その中から自主運営をしたいという人たちも出てくるかもしれません。そういうことまで含めて、多様な人材を吸収できるようなシステムにしていってくれたらありがたいと思っております。

○菅原委員 元町のまちセンが、4月に自主運営になりましたね。ここは、従来、仕事のほうにはほとんどなかったのです。ですから、入りやすい部分もあったのだと思います。ただ、そこが第1号ですから、それこそ集中して元町に目が行っていますので、大変だと言っておりますけれども、成功させなければいけません。それがだんだん普及して、今度は自分たちでまちセンの自主運営をしなければならないとなると、相当の人材を育成しなければなりません。ただ運営するだけではなくてね。そういう地域のまちづくりセンターになってもらえればいいなということで、今、元町に目を向けているところです。

○河野部会長 人を育てながら、活動をしていき、その活動がまた人を育てていくという相互に関係していくような展開がされるといいですね。

○菅原委員 そうすると、地域の人材もそこで育成されていくと思っております。

○河野部会長 本当に期待されますね。

安田委員、どうですか。

○安田委員 私は、市民活動をすることで、地域の経済が回るようになっていけばいいなと思うのです。企業との連携というのは、企業というふうに考えたら、例えば、地元の商店街とか商店、今、公共民間施設の有効利用という項目もあるのでありますが、市民活動をする、そこで人が集まる、集まることでお金が回る、その近所で買い物が始まる、そういう形にしていくと、小さい規模ですけれども、地域の経済が少し回るわけです。そこまでつなげられると、いろいろな人たちから、お金のためというわけではないですが、そこに暮らしていて、そこにいるメンバーの人たちが市民活動は力があるなど、自分たちのまちの活性化にもつながるのかなという実感を得られると、もう少し土台も出てくるかなという気がするのです。今のところ、私は人の部分でかかわっていますけれども、目標としては、そこまで視野に入れていければと思っています。それがどこかに入っていればいいと思うのですが、そういう言葉は市民活動促進までとは言い切れないので、せめて、どこかに商店街という言葉がちょっと入っていればいいなという気がします。

○河野部会長 地方に行くと、釧路のNPOでは2億、3億というものも生まれて、地域を網羅しています。閉そく的になっている地域が、ある意味で経済的に動きながらお互いに支え合うというまちづくりが進んでいるというか、今、そこに注目されております。まちづくりで、人も育つし、そこで経済も回るようなシステムはすごく大事ですね。本当にそうだと思います。いいご意見をいただきました。

白井委員、お願いします。

○白井委員 これまでは、企業社会が中心になって経済的な成長を追い求めてきているのですけれども、その中で、今まで人々は市民というより消費者だったわけです。ですから、こういうものが便利で、こういうものが楽しいですという形で、ある面ではその経済の

中で動かされてきたわけです。今度は、地域の中で自分たちが自分たちの人脈で動かしていくという社会に近づいていくためのまちづくりだと思うのです。そういうときに、特に経済というのは、ある面では大量生産、大量消費ですから、そういうマスの論理ではない部分をどうやってつくるかということが基本にあると思うのです。先ほど安田委員がおっしゃいましたが、その辺で地域あるいはまちづくりがかぎになれば、もちろん企業の社会はあっていいのですけれども、その社会がもうちょっと重層的になるのかなという視点がベースにあると、随分違うと思います。

○河野部会長 ありがとうございます。

岩見副部会長、お願いします。

○岩見副部会長 僕はすごく気になるのは、札幌というまちに戸建て住宅がどんどん減ってきて、マンションばかりふえてきて、マンション中心の大都会のまちづくりとは何なのかということが全然見えていないのです。そして、前から言っていますように、結局、みんな孤立化してしまっているというふうに流れていますが、それがすごく気になります。こういう時代の新しい視点のまちづくりをきちんとやっていかないと、なかなか地に足のついた活動になっていかないと思っていますところ。

○横江委員 それに関連して、企業のCSRにも関連するのですが、マンションとかアパートとかいろいろなものがふえてきたときに、それを管理する管理組合なり企業なりが、そこに住む人たちがまちづくりに参加するとか協力できるような協力体制、指導をしていくと。いわゆる町内会には必ず入るとか、そういうことを推進する企業については、まちとしても全面的に支援していくと。消防の有料物件ではないですけども、アパートの有料物件ではないですけども、きちんと管理会社なりオーナーさんが、これは町内会費、排雪費、ごみの問題、いろいろな形で協力してくれる物件ですということで地域で支援していきたいと。そういう仕組みをうちの町内会でやりたいと思って、アパート物件を全件調査を入れたのですけれども、それを進めているのです。そんなことを全市的にできないかと思っています。

○河野部会長 これから、新しい視点がきっと必要になってくるのでしょうかね。ニーズも本当に多様になってきています。今までなかったようなことが新しい課題になってきているというのは、年度、年度のことなのではないかと思うと、新しい視点というか、すごく敏感にとらえながら計画づくりをしていかなければいけないと思います。

私は、事務局に本当に感謝したいと思うのですが、こういう場で意見交換をすることで新しい面を開けていけるといふか、本当にそれが学習だなと思っています。そういう場が地域の中につくられていくと、いろいろな形でみずから動き出すようなものを得られるのではないかと思います。

きょうのところはこの辺で閉じさせていただきまして、整理された後に、もう一回、開催するということです。

事務局に戻いたします。

○事務局（大瀬係長） どうもありがとうございました。

きょうちょうだいしました意見を私どもで整理いたしまして、今、河野部会長からもありましたけれども、もう一回、計画部会を開催させていただきたいと思っております。これから日程調整をさせていただきますけれども、11月の初旬あたりに5回目の計画部会を開きまして、それを受けて、11月下旬あたりに促進テーブル全体の本部委員会を行いまして、答申案全体の確認をします。微調整等につきましては、その後、起草委員会のようなものでやっていこうと思っておりますけれども、12月中に答申という形になります。来年以降、計画の素案で、パブコメは2月か3月くらいかなと考えております。

計画部会としては、次回が最後になると思っておりますけれども、11月5日から12日の間くらいで決めていただければと思います。

〔 次回部会の日程調整 〕

○河野部会長 それでは、次回は11月12日の夜6時からとさせていただきます。よろしく願いいたします。

あとは、事務局からございませんか。

○事務局（大瀬係長） 特段、ございません。

4. 閉 会

○河野部会長 それでは、これで第4回促進テーブル計画部会を終わりにします。次は、12日にまたお集まり願いたいと思います。

きょうは、どうもありがとうございました。

以 上→